

「大分県の魅力と巡り合うターミナル」

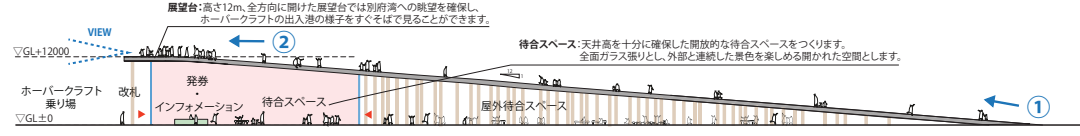


① 緩やかなスロープに導かれる

② 展望台から別府湾を望む

■ 空へと上昇していく外観 - 宇宙港大分を象徴する姿を -

別府湾から見える外観には細心の注意を払いつつ、別府湾岸に対して賑わいのある美しい景観をつくります。また雄大な別府湾岸に馴染み、街の日常風景の一部として調和する構えをつくります。緩やかな勾配で空へと上昇していく外観は、大分を一望できる展望台へ滑らかなシークエンスをつくります。施設に訪れた人々が自然と展望台へと足を運び、美しい別府湾を感じ、ホーバークラフトの発着を望んだ後に、大分市を眺めながら下っていく体験が可能です。



■ 大分県産材や地域材の活用

地域で育った木材を使用することで、地域の気候・風土に合った建築をつくります。又、木材が持つ温かさが居心地の良い待合スペースを演出し、街のシンボルとなる建築をつくります。

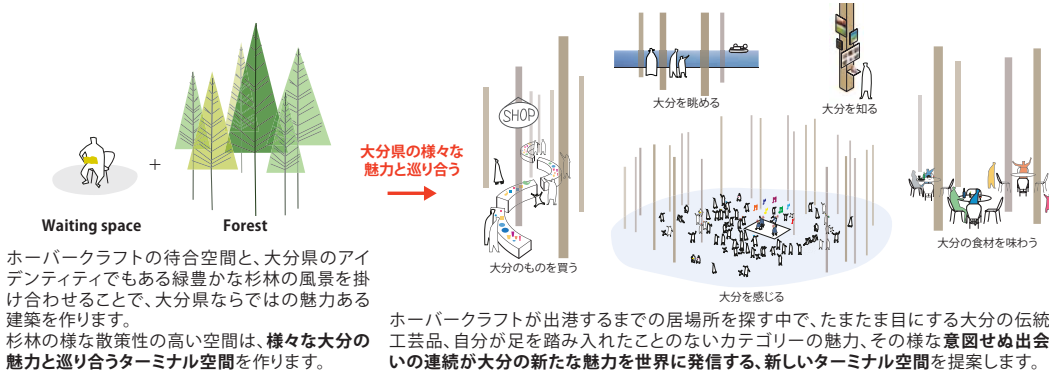


■ 施設完成後の未来を見据えた計画

現在の大分市のマスタープランで定めているかんたん港園と大分港エリアの「創造・表現地区」、今回の計画地を含む「元気回復地区」を結び、ペイサイドエリア一体の賑わいをつくる計画を見据え、未来の動線計画、車両動線にも対応可能な配置計画を行います。



■ 大分の様々な魅力と巡り合う新しいターミナル空間の創出

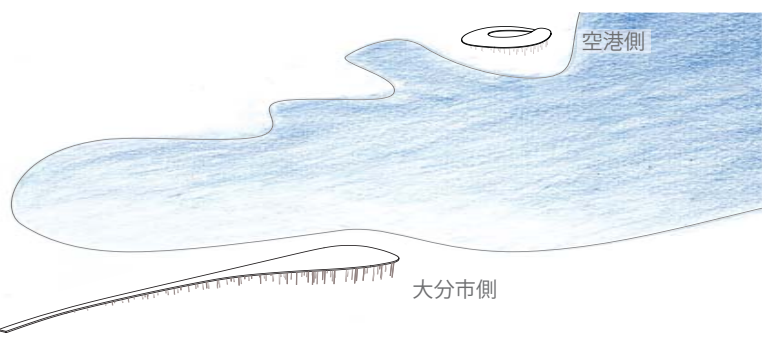


■ 「大分県の2つの玄関口」

空港側、大分市側の2つのターミナルを同じデザインコードで設計し、大分県の玄関口となる建築をつくります。

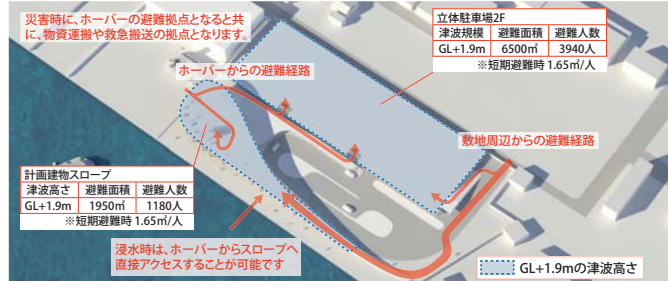
大分原風景を設計の要素に用いたターミナル空間であることにより、ターミナル利用者を大分県の魅力で「向かい入れる」、あるいは大分県の魅力で「送り出す」大分県の玄関口となります。

穏やかな佇まいのランドマークは日常的な風景の一部でありながらも、訪れた人々の意識の中に潜在化され、誰もが認知する大分の顔となります。



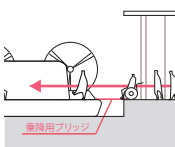
■ 避難計画

大屋根は津波発生時に一斉非難に対応した十分な幅のスロープを確保しており、地上から屋上まで繋がることで周辺敷地からの非難にも明快な避難計画となっています。

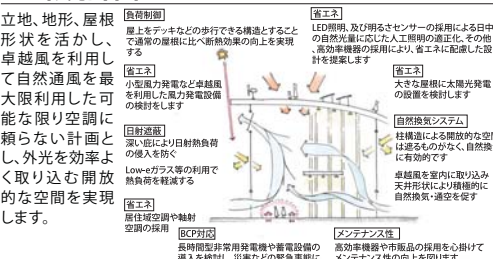


■ 乗降計画

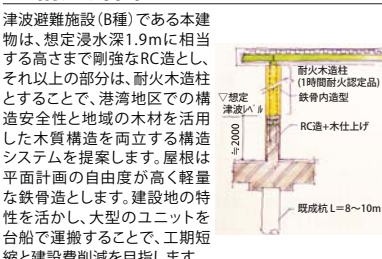
ホーバークラフトの乗降高さや床面の高さを合わせ、バリアフリーに配慮した乗降計画とします。



■ 環境計画



■ 構造計画

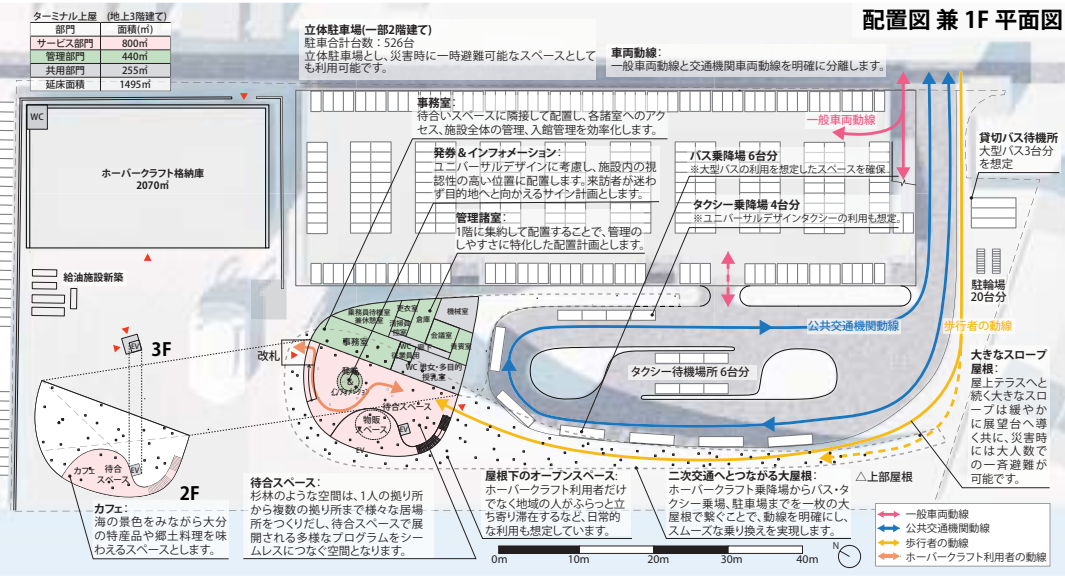


■ 大分原風景

木々に囲まれ、木々とともに生活をする。そんな大分原風景ともいえる杉林のような建築を提案します。地域の人達にとっては親しみやすい街のリビングのような場所となり、県外・海外からの来訪者に対しては、地域材の魅力伝えるとともに、木々を利用した美しく力強い空間を演出します。

■ 穏やかなランドマーク

周辺建物の高さに配慮した計画とします。海に向かい緩やかに上がる外観は穏やかに佇む、街のランドマークとなります。



■ 宇宙港としての国東市側ターミナル

2020年、アジア初の宇宙港としての大分空港にふさわしい建築を提案します。

この場に訪れた人々が旅へと出発する場所として、「空へと上昇していく景観」をつくります。緩やかに上昇する外観は展望機能も兼ねており、大分空港の飛行機の発着を望むことも可能です。

